

Title	「現場」について：障害とアート研究会とのかかわりから
Author(s)	井尻, 貴子
Citation	臨床哲学. 2009, 10, p. 113-124
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/8932">https://hdl.handle.net/11094/8932</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 《研究ノート》

### 「現場」について

#### ——障害とアート研究会とのかかわりから

井尻貴子

#### 1. はじめに

「経験批判としての臨床哲学」のなかで中岡成文は「社会の現場にコミットすることを宣言する臨床哲学は、(中略)『知識の生産』の場面にも切り込んで、そこから動きを引き起こすことを狙っている」<sup>1</sup>と述べている。

現場にコミットする、現場にかかわる、哲学。臨床哲学は、哲学が現場とのかかわりを持たなくなってしまった状況を危惧し、密室での孤独な思索によってなされる哲学あるいは哲学史研究とはまた別のあり方を提示するもの、また、そうあろうとするものとしてはじまった。このような思想的運動としての臨床哲学に私は強く惹かれた。

しかし「臨床哲学にとっての現場」という言葉、現場に出かける、現場で見る、現場で考えるといった表現を幾度も耳にするにつれて、違和感が膨らんでいったように思う。そして、それは、何気なく発せられた「フィールドを持ちなさいと言われている」「井尻さんはフィールドを持っている」という言葉に対し、戸惑いを抱いたことにより、はっきりと自覚させられることになった。私は「フィールドを持っている」のか。「フィールドを持つ」(発言者は、フィールドという語を現場という意味で用いていた)、「現場を持つ」。その、持つ、という語の能動的な意味合いに感じるひっかかり。現場とは、能動的に選択し、持つことができるものなのだろうか。

いや、そもそも、臨床哲学にとっての現場というものがあるのだろうか。

本研究ノートでは、私にとっての「現場」とみなされることの多い、一つの活動—「障害とアート研究会」について具体的に述べながら、「現場」について考えてみたい。

「現場」について考えること、「現場」に身をおくこと。どちらが先ということなく、

この二つは常に重なりあい、展開しているように感じる。思うに、考えながら具体的な活動に従事することは、やんわりと形を思い描きながら、その輪郭線を幾重にも重ねていく作業なのかもしれない。思考の深まりは、あるいは活動の深化は、この二つの間を、幾度も行き来することによってなされるのではないだろうか。

## 2. 障害とアート研究会について

2008年4月から12月にかけて、障害とアート研究会<sup>2</sup>を計5回開催した。

私はコーディネーターとなり、開催趣旨のまとめ、発表者の決定や依頼、会場探し、参加者集め、当日の司会進行といった役割を担った。

なぜ「障害とアート」なのか。簡潔に述べておきたい。近年「アウトサイダー・アート」、「アール・ブリュット」<sup>3</sup>の美術展が多く開催されるようになった。それらの展覧会は、福祉の文脈ではなく、アートの文脈でそれらの作品-そこで展示されたものの多くは、何らかの障害のある人の作品であった-を捉えることを観る者に要請し、日本の美術界に「アウトサイダー・アート」「アール・ブリュット」といった新たな概念を提示、定着させるに至ったといえるだろう。これまで評価されなかったものに目にとめ、再評価することは、確かに重要だ。しかし、それは一方で、ひとつの価値体系-「アウトサイダー・アート」、「アール・ブリュット」であるものが、障害のある人のアート作品のなかでも、その芸術的価値が認められたものだ、という考え-の構築に加担することにつながるのではないか。それは、ときに、そのなかに入らないものを排除する傾向を招く。だがそのことには、注意が向けられない。その事態に危惧を覚えた。無条件にそれをよしとするのではなく、その前提を問う場が必要だと思ったのだ。

以上のことを踏まえ、次のような障害とアート研究会趣旨文を作成した。

障害とアート研究会とは：

障害とアートにまつわる状況は、近年めまぐるしく変化しつつあります。人々の関心も高まり、さまざまな立場から、さまざまな研究もなされるようになりました。しかし、その多くは、異なる専門領域での発表とされ、そこで用いられている「障害」や「アート」の概念も同じではありません。また、現場とは別の場所で研究が進められ、

現場×研究の繋がりが分断される傾向にあることも懸念されています。このような状況において、私たちは、いまあらためて、障害とはなにか、アートとはなにか、について、分野や職種を横断し、さまざまな人と考える場を持ちたいと思っています。障害とアートを、ひとつの固定化された枠組みのなかに囲い込むのではなく、いま生まれつつある状況のなかで、ひろく捉え、みてゆくことが大切だと考え、そのような場として、研究会を位置づけています。ここでは、障害とアート、人と人の交わる場所から、社会を考えることまでも目的としています。

この趣旨文のなかで「現場」という語を用いたのは、社会福祉では「現場」という語を日常的に使い「現場を『実践の最前線』あるいは『現実を目のあたりにする場』として重視」<sup>4</sup>していることを考慮したからだ。「研究会」という名称ではあるが、研究者だけではなく、自分は「現場で活動している」と思っている実践者にも参加を呼びかけることを意図した。障害のある人の多くは、あるいは自分には障害があると感じている人の多くは、そのような実践者とともに、日常を過している。その部分を抜きにして、研究者の言葉だけが一人歩きするような事態は望ましくない。もちろん、当事者にも参加してほしいと考えている。そのような、様々な立場の参加者にとって発言しやすい場にするために、研究会の開催にあたり、「前半1時間を話題提供者からの発表、後半1時間を、発表からみえてきたことについて、参加者みなで話し合う時間」と明示した。

後半の時間を「参加者みなで話し合う」と明記した理由としては、前述した目的に加え、哲学カフェ<sup>5</sup>が念頭にあったことがあげられる。それは「『講演』や『演説』という一方向的な情報伝達とは異なり（中略）参加者全員での議論が中心」であり、「議論への参加も強制ではなく、自発性にまかされている。誰もが発言者になり得るし、聴衆にもなり得るという議論空間」<sup>6</sup>である。参加者ひとりひとりに、自分もその場をつくっている、という意識を持ってもらうこと、話題提供者の話を一方的に聞くことが多くなりがちな参加の体制を変えることを意識した。

また参加者は固定せず、そのつど募集を行った。繰り返しになるが、あらゆる人に、「私も参加できる」と感じてもらいたい、というのがその理由のひとつである。実際には、哲学カフェについて論じるなかで指摘されているように、研究会という形式が「言葉を通して議論すること」や「話しを聞く」ということにコミットする活動であり、それ以外の活動を排除していることは否めない。また「そこに集まる」という様式自体が、参加する者

を限定することにもなる。とりわけ、開催時間（平日の19:00～21:00）については検討が重ねられたが、参加者が様々であるだけに、最適なものはないと言えるように思う。

いずれにしても、哲学カフェ同様、参加者の自発性、複数性が要となる活動だけに、ハード面（会場、開催時間の設定など）でもソフト面（発表内容、進行方法など）でも参加者の反応をうかがい、改善を重ねる必要があるだろう。

以上、私と「障害とアート研究会」の具体的ななかかわりについて述べた。

だが先の趣旨文を提示しながらも、ひとつの疑問を抱くことになる。便宜的に「現場」と「研究」という言葉を二項対立的に用いたが、この二つの語は、対立するものなのだろうか。この研究会は研究の場であり、現場ではない、ということになるのだろうか。いや、そうではないだろう。私は、この研究会もひとつの実践の場であり、現場でもあると考えている。では、なぜそう考えるのか。それは、どのような現場なのか。

「現場」および現場とのかかわりについて考えるなかで、その理由についても明らかにしたいと思う。

### 3. 「現場」と、現場とのかかわり

#### 3-1. 現場について

「臨床哲学」の提唱者である鷺田清一は、現場について次のように述べている。

『現場』ということばでしばしば語られる場所とは、（中略）複数の主体が共時的な相互接触へとさらされる場所のことである。<sup>7</sup>

彼によれば、共時的とは「おなじ時間のなかでたがいに絡みあって活動している状態」を意味している<sup>8</sup>。そして「他者と時間を繕いあわせながら、あるいはおなじ時間をともに経験しながら、そういう共時的な関係のなかで哲学的思考が『苦しみをとみにすること』として活動を開始するところで、臨床哲学の試みははじまる」と宣言する。

また、清水哲郎は臨床倫理学にとっての現場について論じた文章で、現場について次のように述べている。

Xの現場とは、Xという活動がなされている場であり、その活動の当事者たちが出会い、協働し、時に対立しながら、Xという活動のプロセスが進んでいく、そういう場である。<sup>9</sup>

そして自分が「医療現場に挑む」というとき、「現実の現場に、現実には立ち会っているわけでもない」とし、「医療者のことばを通して現場を見るという仕方、すなわち、医療者たちに立ち現れている現場を観るという仕方」で、現場をロゴスの上で再構成し、かたちを捉えようとしてきたと述べる<sup>10</sup>。

清水は、「現場に臨む哲学」という言葉で、自らの現場とのかかわりを表明する。「<臨む>ということは、単に現状を遠くから批判することとは異なり、現場に寄り添うことである。そこで未来を模索する人々と共に生き、時に手を汚すことをも厭わない意志的な姿勢である。」

ここで語られる「現場」は、ともに、端的に言ってしまうと「私が（あるいは、誰かが）他者とともにあり、相互接触をおこしながら、活動している場」であろう。私も、現場とはそのようなものだと思う。だが、たとえば清水の、現場にかかわる者として自らを位置づける文章に、そしてその姿勢を表明することに、冒頭で述べた戸惑いと同様のものを感じてしまうのだ。「現場」との「かかわり」は、このように、選択し、宣言されるべきものなのだろうか、と。

### 3-2. 「かかわり」について

西村ユミは、「語りかける身体—看護ケアの現象学」のなかで、私たちが誰かにかかわっているとき、そのかかわり方は、私からのみ発生しているのではなく、すでにその相手によって誘発されてしまっているもの、と述べている<sup>11</sup>。

現場に対しても同じようなことが言えるのではないだろうか。かかわるということをしていると同時に、かかわることに選り取られてしまっている。現場にかかわる、と言うとき、現場は自分とは別のところにあるのではなく、自分のあり方が反映され、それにより変化し、またそれをうけ、自分のあり方も変わっていくような営みのなかにあるように思う。つまり、そのとき、すでにまた新たな場が生じてしまっている。そして私は、かかわ

ってしまっているからこそ、その場が現場として感じられる、あるいは見えるのであって、私がかかわっていない現場を私は知ることはできない。

その意味で、現場を持つ、ということはおろか、現場に寄り添うということは不可能なのではないだろうか。たとえ、そこに現実には立ち会っていないとしても、かかわってしまっている、ということは、その場における相互作用のなかにすでにいる、ということだ。持ったまま、寄り添ったままでいられはしないのではないか。

「現場（フィールド）を持っている」という言い方に戸惑いを感じたのは、それがあたかも、自分と切り離されたところに、それとしてあるように聞こえたからだ。

ここへ来て、「臨床哲学にとっての現場」という議論に対し、違和感を覚えた理由も、少しわかったように思う。その表現では、誰、という顔が見えない。考えているその人が見えないからではないだろうか。いま述べてきたような理由から、私は、臨床哲学というものにとっての現場は、あるものではないと思う。あるとするならば、臨床哲学というものにとっての現場ではなく、私が、いまここでその営みのなかに身をおき、営みの一部となっているような、場の現れだろう。

そのような意味で、この研究会が、私が、障害とアートに関わる問題を複数の人とともに考える場としてあるならば、そしてそこで考えることにより、また私の明日が少し変わっていくようなことがあるならば、そこは私にとっての現場であると言えるだろう。そして、それと同時に、そこに身をおく人、それぞれの人にとっての現場でもあるのだと思う。

#### 4. 現場と実践

最後に、実践という考え方について簡単に述べたい。先に私は「この研究会もひとつの実践の場であり、その意味で現場でもあると考えている」と述べた。本研究会は、私にとって、コーディネートという行為を介し、思考することを繰り返し、研究会という場をつくるという実践のひとつである。しかし、この研究会はわたしにとってだけの、実践なのだろうか。いや、そうではないだろう。コーディネートという行為だけが実践のかたちではない。

中村雄二郎は実践について言語の役割という観点から次のように述べている。「人間が実践をとおして現実と関わる時、そこに言語が介在して大きな役割を果たしていることを示している。(中略) 言語あるいはことばは、むしろ一方ではコミュニケーションの媒

体として社会に開かれているが、同時にそれは、さまざまな物事を各人それぞれの身体性を帯びた自己と結びつけ、内面化する働きをもっている。このような言語の働きが、実践ということの、現実との重層的なかかわりを捉え、示すのである。」<sup>12</sup>

また、本間らは社会科学などにおいて積み重ねられた「実践」に関する議論を踏まえ、実践とは「つねに身体と状況をともないながら知を生み出し、運用・伝達する行為一般のことを指す」<sup>13</sup>と述べている。

とすれば、私だけでなく、話題提供者・参加者にとって、本研究会に参加することもまた、ひとつの実践のかたちであろう。研究会という場に身をおき、発表をする。発表者の話をきく。ある問題を共有する。その問題について考えるヒントを、自らの体験のなかに見出す。あるいは、話をきき、なにかを思い出す。そのなにかの、新たな意味が付け加えられる、捉え方が変わる。そしてそれを語りだす。「私がやってきたことはこういうことだった。いまの話聞いて、それは、こう捉えられるのかもしれないと思った」というように。しかし、発言すること＝実践なのではない。そのようなことが起こりえる場に身をおく、ということ、そのことが重要なのだと思う。そこにいる者は皆、その場の現れに参与している。その意味で、その場にいる私たちは、現場を生成する協働的主体でもあり、実践者であると言えるのではないだろうか。

## 5. おわりに

以上、「障害とアート研究会」という活動について具体的に述べながら、「現場」について考えることを試みた。

「現場」とはなにか。その疑問に対するひとつの答えを出そうとしながらも、どこかで答えはひとつではないようにも感じている。それは、その答えを一本の線ではなく、幾重もの線を重ねることで、明らかにしていきたいと思っているからかもしれない。まだ、その途中の段階にある。これからどのように描いていくのか。自分自身楽しみながら、動き、考えていきたいと思う。



## <障害とアート研究会 開催記録>

### ■第1回研究会

- 話題提供者：中谷和人（京都大学大学院 人間・環境学研究所 文化人類学分野 博士後期課程）
- タイトル：『障害をもつ人びとの「芸術／アート」はいかに語りうるのか—施設における創作・活動の現場から』
- 内容：関西のふたつの「アート」を主体とする福祉施設—「アトリエ・インカーブ」、「たんぼぼの家」—で、それぞれ2ヶ月以上行ったフィールドワーク。そこに身を置いたことによってみてきた、彼らの制作の場であり、生活の場である施設という切り口から、『障害をもつ人びとの「芸術／アート」』について、いかに語りうるのかについて考える。
- 日時：2008年4月21日（月） 19:00-21:00

### ■第2回研究会

- 話題提供者：新川修平（片山工房（神戸市長田区）代表）
- タイトル：実践報告「障害者アート団体 片山工房の活動から」
- 内容：2003年からはじまった、障害者の自己表現（創作活動）を探求する場「片山工房」におけるアート活動への取り組みについて報告する。また、活動のなかでみてきたこと、「なぜアートなのか」について考える。（片山工房 <http://studio.kobe-katayama.com/?cid=1799>）
- 日時：2008年6月16日（月） 19:00-21:00

### ■第3回研究会

- 話題提供者：岸中聡子（大阪府立大学大学院人間文化学研究所比較文化専攻 博士課程前期修了。現在は、産業カウンセラーとして離職者の再就職支援に従事。）
- タイトル：「障害者アート」と「共同性」—ある知的障害者の創作現場から
- 内容：障害のある人のアートについて、その創作過程における援助に着目し、「共同性」というキーワードから考える。また知的障害者授産施設である「あけぼの寮」（仮名）で1ヶ月にわたり行ったフィールドワークにおいて経験したこと、考えたことについて報告する。
- 日時：2008年7月8日（火） 19:00-21:00

### ■第4回研究会

- 話題提供者：渡邊あい子（立命館大学大学院 一貫性博士課程 先端総合学術研究科公共領域4年）
- タイトル：「異なる身体」の交感可能性——コンテンポラリー・ダンスを手がかりに」

- 内容 : 「医学モデル」に重きがおかれがちな、障害者の身体に対するあり方。しかし、パフォーマンス・アーツという土台に乗ったとき、「(治療的) 効果」という視点は中心から外れる。障害への「配慮(ケア)」ではなく、障害をもって生きる身体:存在としての身体との「出会い」への転換。感受し呼応し合うといったコミュニケーションの土俵を身体として捉え、ダンスにおける身体観の変化を、コンテンポラリー・ダンスのワークショップをてがかりとし考える。
- 日時 : 2008年11月12日(水) 19:00-21:00

#### ■第5回研究会

- 話題提供者: 榎 邦彦 (コマイナーズ・コレクティブ: 劇団制作を経て介護の仕事につかたわら、バンド「コマイナーズ」としても活躍中。YMCA 学院高校非常勤講師。)
- タイトル : 「とざい、とーざい、ちんどんチャンス!ができるまで」
- 発表内容 : 障害者とそのヘルパーとアーティスト達による"こえ"と"ことば"の舞台として活動した「ほうきばしブラザーズ」。好評を博していたものの1年余りで解散。「ほうきばし」でつかんだ手ごたえや運営体制を継続させる仕組みとしてひらめいたのが「ちんどんチャンス!」。大阪府庁内と周辺を練り歩く企画で華々しくデビューしたものの、現在ゆるく停滞中。これらの活動の報告をするとともに、活動を継続していく過程で露呈した様々な問題について考える。
- 日時 : 12月17日(水) 19:00-21:00

#### (開催場所、主催者、共催者)

##### \*第1回～3回

- 場所: 應典院 研修室
- 主催: 財団法人 たんぼぼの家
- 共催: アートミーツケア学会、應典院寺町倶楽部、エイブル・アート・ジャパン

##### \*第4回～5回

- 場所: 京阪電車 なにわ橋駅アートエリア B 1 <http://www.artarea-b1.jp/index.html>
- 主催: 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター、財団法人たんぼぼの家
- 共催: アートミーツケア学会、エイブル・アート・ジャパン

#### (コーディネーター)

##### \*第1回～第5回

- コーディネーター: 井尻貴子 (大阪大学大学院 文学研究科 臨床哲学 博士前期課程)

## 注

- 1 中岡成文「経験批判としての臨床哲学」、飯田隆等編著『岩波講座 哲学 第1巻 いま〈哲学する〉ことへ』、岩波書店、2008年、237頁
- 2 主催：財団法人たんぼの家 共催：アートミーツケア学会、エイブル・アート・ジャパン、應典院寺町倶楽部 会場：應典院（大阪）
- 3 アールブリュットは、1948年フランス人画家、ジャン・デュビュッフェが提唱した。デュビュッフェは、アンドレ・ブルトンら作家の友人とともに「アール・ブリュット協会」を設立し、作品の収集、研究、展示を行った。その後、協会は解散するも、紆余曲折を経て1971年、デュビュッフェは40年間にわたり収集してきた5000点に及ぶコレクションを、スイスのローザンヌ市に寄付する。そして1976年よりコレクションの一般公開が始まった。

アール・ブリュット・コレクションの館長リュシエンヌ・ペリーは、日本の作品を紹介する特別展「JAPON」のカタログにアール・ブリュットの本質をこう記している。

「並外れた才能あるアーティストを選択するうえでの基準は、ジャン・デュビュッフェの提言するアール・ブリュットの提言するアール・ブリュットの定義を明示するもの。つまり、美的、哲学的な秩序に則っている。その基準とは、芸術教育を受けていないということ、創作活動や表象の行程に新たな意味付けをすること、独創的かつ一貫性のある表現体系の適用、特定の文化に列しないこと、などである。また、創作活動の自給自足的な発展、受け手の不在、作者がいかなる文化的社会的認知や賛辞にも無関心であること、などがあげられる」（はたよしこ編著「アウトサイダー・アートの世界―東と西のアール・ブリュット」、紀伊国屋書店、2008年、16頁）
- 4 尾崎新「葛藤・矛盾からの出発」、尾崎新編『『現場』のちから - 社会福祉実践における現場とは何か』、誠信書房、2003年、2頁
- 5 哲学カフェは、1992年に「カフェ・デ・ファール」（フランス）ではじまった。進行役はマルク・ソーテ。だがそれは、準備されたものではなく、偶然によるものだった。その後活動に共感する人々を中心に活動が広がった。その形態は多種多様であるが、本間らは哲学カフェの最小限度の共通要素として、(1) 場所、(2) 議論のテーマ、(3) 進行役 (animateur/facilitator) を挙げている。(本間直樹、高橋綾、松川絵里、榎本直樹「哲学カフェ探求 活動とインタフェイス」、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」研究報告書2004-2006『第8巻 臨床と対話』、128頁)
- 6 本間直樹、高橋綾、松川絵里、榎本直樹、同上、139頁
- 7 鷲田清一『『聴く』ことのかー臨床哲学試論』、TBSブリタニカ、1999年、56頁

- 8 鷺田清一、前掲書、56-57 頁
- 9 清水哲郎「現場に挑む哲学の可能性」、飯田隆等編著『岩波講座 哲学 第1巻 いま〈哲学する〉ことへ』、岩波書店、2008年、254頁
- 10 同上
- 11 西村ユミ『語りかける身体 看護ケアの現象学』、ゆみる出版、2001年
- 12 中村雄二郎『臨床の知とは何か』、岩波書店、2002年、68-69頁
- 13 本間、前掲論文、132頁

